大阪教育大学　グローバルセンター発行「オーバー・ザ・レインボー」　2022年3月発行

https://ger.osaka-kyoiku.ac.jp/

OVER the RAINBOW

vol.29・30

巻頭言

大阪教育大学　学長　**栗林　澄夫**

『育てること、学びあうこと』

TOPICS

■長谷川先生～退任にあたって～

■スタッフ紹介

■コロナ禍における学生の取り組みとメッセージ
- 本学から派遣する留学生の抱負
- 現在本学で研究をしている教員研修留学生
- 山本国際学生宿舎でのＲＡイベント
- チューター活動

■2021年度前期・後期修了留学生メッセージ

■留学生コラム

■グローバルセンターニュース＆More！
- UNCWオンラインプログラム
- グローバルセンターシンポジウム
- 留学生支援のお願い

雪が積もる柏原キャンパス（柏原キャンパス）

巻頭言

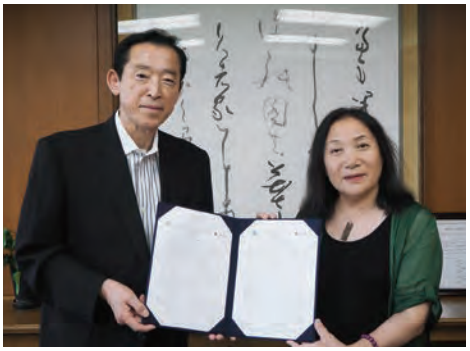
大阪教育大学　学長　栗林　澄夫

『育てること、学びあうこと』

大阪教育大学の学長として仕事をするようになってから既に８年目が過ぎ去ろうとしていて、私は今度の3月末をもって任期満了で退職いたします。これまで、副学長や理事、そして学長などの役員職をさせていただいた年月を通算すると２０年近くになり、その間に大学構成員の皆さんにお世話になったことを思い出すと、アドバイスやサポートいただいた内容に感謝の思いが心の中に湧き上がってきます。そうした思い出にも増して強い印象として残っているのは、現在のグローバルセンターの前身の、留学生指導センターのセンター長として活動させていただいた年月でした。私がセンター長をお引き受けした時点で、大学教育における国際化は既に活発化してきていましたが、教員の養成を中心的な業務とする所謂単科の教育大学については、留学生受け入れ２０万人計画を文部科学省が重点大学としての東京学芸大学へ集約化していた事情もあり、大阪教育大学の留学生総数はわずかに５０名程度でした。しかし、グローバル化の進展による外国留学への関心の高まりは日本以外の外国では非常に強く、２０年前のこの時点で既に日本でも活発化してきていて、それが後に現在の留学生３０万人計画に結びついていくことになりました。一方、日本の国立の教員養成大学や総合大学の教育学部には、自分たちが日頃意見交換を行う交流の単位である教員養成の協会やコンソーシアムの動向が参考のための相対的な基準になっていたようでした。教員資格取得のための課程認定制度に端的に表れている履修主義的教育制度を大学教育の根拠と見做していたためでしょうが、世界の高等教育機関の多くは、そこで学べばどのような普遍的な能力が身につくかという修得主義を根拠としているため、接点を見出すことが困難だったのかも知れません。ただ、シンガポールの南洋理工大学、香港教育学院、上海の華東師範大学、カナダのビクトリア大学、オーストラリアのクイーンズランド大学等の日本の教員養成に直接には連結しない大学で、かつ、世界の大学ランキングでは高い位置を占める大学が本学の活動に関心を示してくれて、協定を結び、交流できていることが、現在の２００名近い留学生数への増加につながっていると評価しています。今後も学生交流を基礎として、国際交流の活発化が進展することを期待しています。

シンガポール・南洋理工大学国立教育学院を訪問（2014年）

派遣交換留学生を激励（2017年）



中国・天津大学と協定を締結（2018年）

退任にあたって

グローバルセンター副センター長
多文化教育系グローバル教育部門教授　長谷川 ユリ

略歴　早稲田大学教育学部英語英文学科卒業。筑波大学大学院修士課程地域研究研究科修了（国際学修士）。専門は日本語教育学、日本語学。早稲田大学在学中にアメリカEarlham Collegeに交換留学。台湾台北市YMCA日本語学科専任講師、早稲田大学非常勤講師、大阪外国語大学非常勤講師等を経て、1995年4月に大阪教育大学留学生指導センター専任講師として着任。主著は、日本語教科書『Total Japanese』シリーズ7冊（早稲田大学日本語教育研究センター、共著）。

私が大阪教育大学に「日本語・日本事情担当教官」として着任したのは、阪神・淡路大震災が起きた１９９５年の４月で、柏原キャンパスに移転・統合して間もない頃でした。１９９１年に初めて学部留学生が２人入学したばかりで、１９９５年には大学院生３６人、学部生９人、研究生１４人、教研生６人の合計６５人の留学生が在籍していました。新しくできた柏原キャンパス内の留学生宿舎は定員４０名で、希望すればほぼ誰でも入居できる余裕がありました。２０２１年度に学部生が１５９人にまで増えるということは、当時は全く想像もできませんでした。現在は８名のスタッフを抱える「国際室」の前身の「留学生係」は教務課内にあり、係長１人、補佐員２人の３人で業務をされていました。交換留学プログラムが始まったのは１９９６年で、４月に初めてタイから２人の交換留学生がやってきました。教務課の前までこの２人に会いに行った時、緊張した中でも笑顔で挨拶してくれたことを今でも覚えています。そして、１９９６年10月には本学初めての日本語・日本文化研修留学生（日研生）を３人受け入れました。単位取得が不要である研究生・教研生とは異なり、交換留学生と日研生のためには新たな授業を準備する必要があったため、「留学生特別科目」としてすでに開講されていた正規生向けの６科目の他に、１９９６年には非正規生向けに新たに４科目開講しました。その後、日本語プログラムを少しずつ充実させていきました。

所属先は「留学生指導センター」「留学生センター」「国際センター」「グローバルセンター」と名前が変わりましたが、この２７年間、皆様に支えていただきながら、一貫して日本語教育、留学生教育、学生の海外派遣に関わって来られたことを心より感謝しています。１つだけ心残りがあるとすれば、これまで送り出した留学生を大学に迎えての「同窓会」を計画していたのですが、コロナ禍により実施できなかったことです。もし「同窓会」を行うことがあれば、１人の「卒業生」として参加させていただけましたら幸いです。

日本文化研修・彦根（2014年）

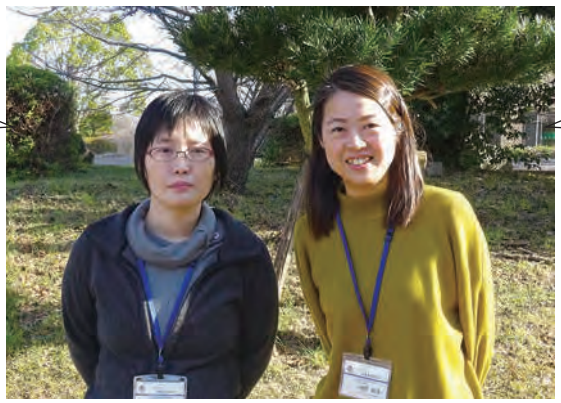
修了式（2020年）

スタッフ紹介

国際室留学生係長　宮永 泉

国際室留学生係の宮永泉です。留学生係となって早いもので、あと少しで1年が立とうとしています。国際室の業務はこれまであまり経験したことがない分野で、未だに新鮮な気持ちで日々を過ごしています。

今年度は、まだコロナ禍の影響により、大学の取り組みや、留学生の受入れ、派遣もまだまだ制限がされている状況ですが、一日も早くコロナウイルス感染症が収束し、様々な活動ができることを願っています。



国際室国際交流係長　中原 麻実

２０２１年７月より、国際交流係に配属になりました中原麻実と申します。私自身、グローバルや国際とは程遠く、留学の経験もありませんが、日本語以外の言語でコミュニケーションをとる様子を日々目の当たりにし、今更ながらもっと英語を勉強しておけばよかったなと後悔しています。やる気いっぱいの学生さんたちに負けないよう、私も学び続けたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

コロナ禍においても、工夫して様々なことに

本学から派遣する留学生

吉川 喜久（キッカワ ヨシヒサ）　（トビタテ*第12期生）教職大学院高度教職開発専攻教育実践力コース2年生
スウェーデン・リンネ大学への交換留学（期間：2022年1月～2023年1月）

「待望の留学　－感謝を胸に挑戦」

1年半の延期になりましたがついにリンネ大学へ留学にいくことができます。大教大で、技術教育を専攻し、学びを深めるうちに、学生の今だからこそ、「世界の技術教育もみてみたい！」という思いが生まれ、初等教育から技術教育が実践される北欧に興味を持ちました。プログラミング教育のカリキュラムマネジメントをテーマに、小中連携のポイントを学び、日本の技術教育がどのように小学校でのプログラミング教育と連携できるかを学びたいです。

また、これまでコロナ禍で多くの留学志願生が渡航できず、先も見えない状況でしたが、モチベーションの維持については、トビタテコミュニティを活用していました。すでに留学に行かれた先輩方との交流や、留学を控えている同じ12期生と定期的に近況報告をしあいながら留学への熱意を維持し続けました。

教職大学院生としての海外留学は初めてということで、指導教員の先生や、大学事務の方、実習校の先生方にもたくさん協力していただき、留学が実現できます。感謝の気持ちを忘れずに、しっかり学んできます。

*トビタテ！留学JAPAN・・・2014年度からスタートした官民協働による「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム～」奨学金
文部科学省主導による官民協働の留学促進キャンペーンで、「グローバル人材育成コミュニティ」を形成し、将来世界で活躍できるグローバル人材を育成することを目的とし、2013年に始動。2014年からは「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム～」がスタートした。手厚い支援に加え、事前・事後研修やトビタテコミュニティと呼ばれる奨学生同士の活発な交流などが特徴。

本学で研究している留学生

教員研修留学生　エセル チャカカドザ（マラウィ出身）

留学期間
2020年10月～2022年3月

みなさん、こんにちは。アフリカのマラウィから来た教員研修留学生のエセル チャカカドザです。コロナ禍にあっても、私が日本で留学生として経験できたことを共有します。パンデミックが皆さんの生活にも少なからず混乱をきたしていると思います。私自身も奨学金支給がなくなりかけていましたが、日本への入国制限が設定される前に日本へ入国できたことは嬉しかったです。1カ月程入国は遅れましたが、大教大の素晴らしいオンライン学習システムのおかげで、自身の研究は中断せずに続けることができました。パンデミックで日本中は旅行できませんでしたが、大阪や周辺地域へは旅行することができました。

大教大で過ごした時間をずっと大切にし、素晴らしい思い出は母国に帰っても私の中で生き続けることと思います。特に指導教員の先生、また大教大のスタッフの皆さんの素晴らしいサポートに感謝します。たくさんの日本人の皆さん、さらに留学生の皆さん、大阪での生活が送りやすいように、大阪の色々なところを案内してくれてありがとうございました。春や秋に見られる大教大キャンパスの息を呑むような風景が見れなくなるのが、とても寂しいです。私にとって、大教大以上の大学の選択肢はありません。

教員研修留学生　オ ユジン（韓国出身）

留学期間
2020年10月～2022年3月

私は教員研修留学生として日本に来ましたが、最初はコロナ禍で日本への入国が制限され、約1ヶ月ほど渡日できず韓国でオンライン授業を受けていました。入国が認められてからも何度もコロナ検査を受け、2週間隔離生活をしなければなりませんでした。その後も緊急事態宣言で制約があって期待していた旅行や学校訪問もあまりできず、すごく残念でした。それでも大教大に来て本当によかったと心から思っております。なぜならば素晴らしい先生と友達に出会えたからです。韓国での経験と日本での学びを合わせてより広い視野を持つことができました。制約の中でも日本の文化や教育を経験できるように、先生方からご支援いただきました。さらに、同じ寮に住んでいた世界各国から来た友達との交流を通して、世界への理解を深めることもできました。チューターや大学院生と一緒にやった勉強会のおかげで日本での生活や勉強のことを助けてもらったり、研究を進めながら仲良くなれたりしたことも嬉しかったです。私の人生にとって大教大での毎日はとても忘れられない思い出になりました。大教大で学んだことを韓国でも活かせるように頑張ります。

取り組む学生からのメッセージ

山本国際学生宿舎でのRA※イベント

奈島 由恵（ナジマ ヨシエ） 教員養成課程 小中教育専攻4年生

※RA（レジデント アシスタント）：留学生が安心して快適な寮生活を送ることができるよう、寮に住みながら留学生を支援する学生。

私は、大学２回生の時に同じサークルの先輩がRAをしていたことがきっかけでこの留学生寮について知りました。「留学生の相談にのったり、課題を手伝ったり、一緒にトランプなどで遊んだりするよ。」と教えてもらい、その当時は、「楽しそうだけど、私にできるかな」と思っていました。

RAタイム（12月）

３回生の秋に、再びRAの募集について知り、それまでずっと実家暮らしで一人暮らしをしてみたいと思っていたこともあり思い切ってやってみようと応募しました。

新型コロナウイルスの流行により、RAタイムを休止にせざるを得なくなった時は、留学生寮にいてもなかなか交流が出来ないというもどかしさがありましたが、今は何人かの日研生が来ることが出来、それぞれの国について話したり、大学のことについて話したり、時にはゲームをして遊んだりと楽しく活動しています。留学生と話す中で、様々な外国の文化などについて知ったり、また、当たり前だと思っていたことについて、日本独特のものだったと知ったりと、日本にいながら外国について多くのことを知ったり、外国からの視点で日本を見たりすることが出来ています。

今年RAとして活動してよかったことはたくさんありましたが、何よりも１番良かったと思うのは外国にたくさん友達が出来たことです。この寮にはいろんな国から来た学生がいます。私は海外留学をしたことはありませんが、たくさんの外国人の友達が出来、楽しく交流をすることが出来ていて、本当に山本国際学生宿舎でRAをしてよかったと思っています。

クリスマス会を実施（12月） 後列左端が奈島さん

タイダイ染めでオリジナルTシャツ作り（7月）

チューター※活動

※チューター：外国人留学生に対して、指導教員の指導のもと、教育・研究や日常生活に関して手助けを行う日本人学生や先輩留学生。

右側が陽沁怡さん、左側が尾崎栞さん

チューター：尾崎　栞（オザキ シオリ） 教育協働学科 美術表現コース４年生

コロナ禍での最初の頃の活動はオンライン中心でした。細かいニュアンスを伝達することが難しかったため、とにかく質問をたくさん投げかけ、留学生が何に困っているのかを探ろうとしていました。なかなか上手くいかないときもありましたが、学生同士でしかできない貴重な経験だったと思います。これから先、さまざまな人々と出会うと思いますが、この経験を生かして相手との対話を図っていきたいです。

留 学 生：陽　沁怡（ユウ シンイ） 教育協働学科 美術表現コース２年生

始めた時とても不安だった。新型コロナの時期で、先輩と会えず、距離感があった。そのため、考えたことをうまく先輩に伝えられなかった。しかも、私は内向的で、課題の問題があったがほとんど先輩に聞けなかった。しかし、今は直接会うので、先輩との距離感がなくなり、課題だけでなく、生活の困ったことも先輩に聞いて話し合う。これからも先輩と留学生活のいろいろなことを話し会いたいと思う。

右側が蔡宇鋒さん、左側が王美芦さん

チューター：蔡　宇鋒（サイ ウホウ） 教育協働学科 数理情報コース３年生

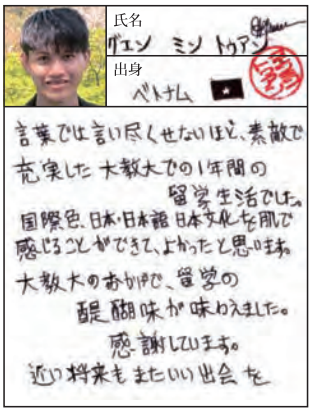
コロナの関係で今年の前期はオンライン授業でした。留学生たちが授業に対して理解しにくかったことをまとめて、指導しました。

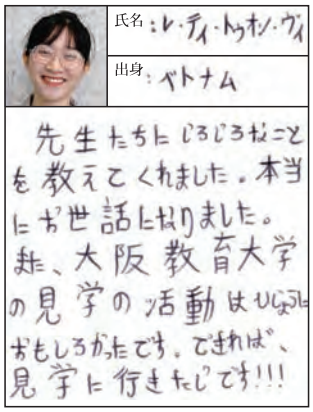
チューター活動を通じで、多くの友たちができただけではなく、活動中に大学生活上で悩んだことについてもお互いに話し合いました。その中から私は多くの経験を得ました。チューター活動から友たちができた事と留学生とお互いに助け合えた事は私にとって一番良かった事だと思います。

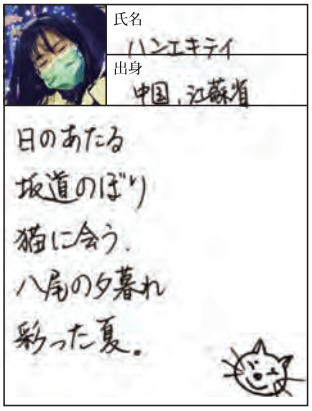
留 学 生：王　美芦（オウ ビロ） 教育協働学科 数理情報コース１年生

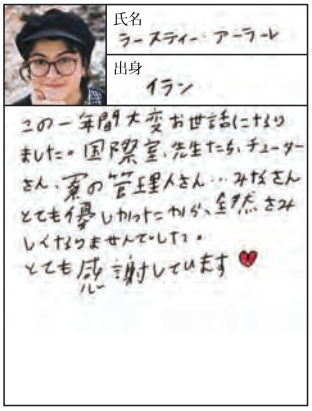
初めて触れる線型代数学のよくわからないところを学校が配置してくれたチューターに聞いたり、話したりしました。数学問題だけではなく、効率的な勉強方法も丁寧に教えてもらいました。また、学校のいろいろなことを教えてもらいました。2回生になったら、どんな授業を受けられるか、将来的に役立つ点は何か、チューターといっぱい話して、自分の学習方向を明確にして、自信を持ちながら勉強していきたいと思いました。

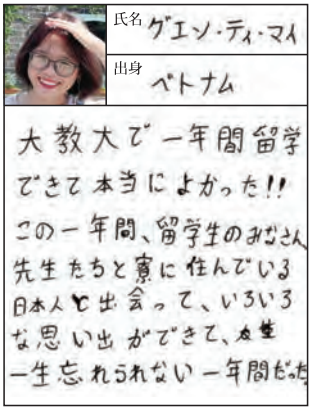
2021年8月修了生

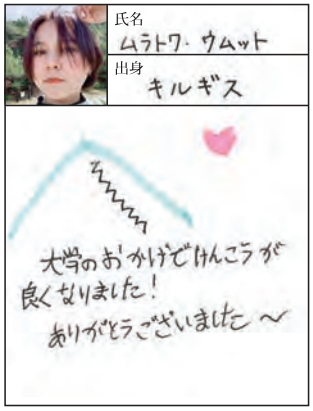




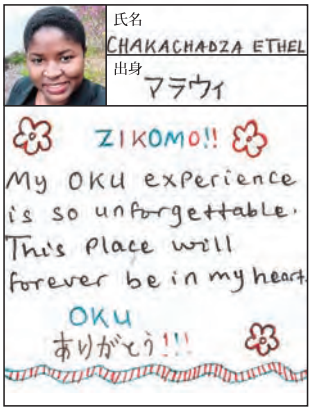


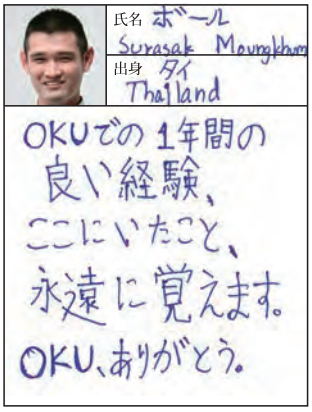






2022年3月修了生





留学生コラム

～Message From OKU International Students～

2018年度入学
教育協働学科 健康安全科学専攻
指導教員：榎木 泰介先生

翟　依群（ジャイ　イチュン）さん　（中国出身）

私が初めて大阪教育大学に来たのは２０１７年の夏、オープンキャンパスの時でした。キャンパスに向かう途中、電車の窓から見える風景が段々緑に囲まれるようになり、大阪の繁華街から離れていきますが、その自然の景色に心癒されました。

オープンキャンパスで出会った留学生の先輩に大教大の専攻から学生生活まで幅広く教えていただき、大阪教育大学を第一志望にしました。そして、無事合格して入学し、充実した４年間を送ることができました。

私が大教大で一番学んだのは人とのコミュニケーション能力に関わることだと思います。大学生には多様な過ごし方がある中、私はここで人生初めての部活を始め、新しい楽器を学んで、専攻以外の友達もたくさんできました。演奏会や新入生歓迎会、文化祭など数多くのイベントに参加して、色々な人と話すのは本当に楽しかったです。たくさんの人と話し合うことで、まるで未知の世界が広がって、新しい物事に挑戦するための入場券をもらったような感じでした。

私は今４年生で、この3月に大教大を卒業しますが、周りの学生達が輝いている様子や部活で頑張って練習した日々、指導教員の先生に丁寧にご指導いただいたこと等、忘れることができません。そして、４年間様々なことで助けてくれた友達や先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも、多くの学生が大教大で豊かな学生生活を送り、素晴らしい青春時代を過ごすことができると信じています。

2020年度入学
大学院教育学研究科国際文化専攻
日本・アジア言語文化研究分野
指導教員：櫛引 祐希子先生

チャン クォック ヒエップ さん　（ベトナム出身）

２０１６年11月、ベトナムから初めて大阪教育大学に足を運びました。たった一日の短い経験でしたが、大教大の景色と学内の雰囲気に感動した私は、いつか大教大の学生になることを願っていました。夢がかない、２０１７年１０月から交換留学生として、1年間留学しました。そして、２０２０年４月からは、大学院生として2年間研究を進めました。

大教大では、大学から学ぶだけでなく、社会から学ぶ、世界から学ぶという、知識と出会う範囲が広いことが分かってきました。コロナ禍の影響で、私たちは数えないほど困難に直面していますが、自分と他の人の安全を守りながら、学業をつづけています。このような“苦境”だからこそ、私たちは普段よりやりがいを強く感じて、困難を乗り越えることができたと考えています。これは、大教大で私たちが自分に潜在している力と意志を最大限に発揮させることを身に付けたからではないでしょうか。

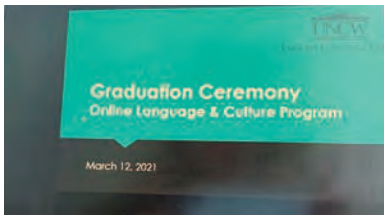
大教大で勇気づけられた私は自分ができること、自分がやりたいことを見つけました。大教大で身につけたことをもって、自分が選んだ道をまっすぐ進むことができると思います。1年間、２年間という時間は長くないと思いますが、私にとって大教大で過ごした学生時代は明るい青春です。

グローバルセンターニュース&More!

UNCWオンラインプログラム
オンライン留学で得たもの

松永 紗那
初等教育教員養成課程　小学校教育専攻 昼間コース　3年生

私は、2021年の2月12日からおよそ1か月の間を利用して、「Online Language & Culture Program」*に参加しました。Integrated SkillsとAmerican Culture、Professional Communicationという3つの授業を受講し、毎日21時から23時までZoomを活用して学んでいました。アメリカの文化やコミュニケーションの特徴について学ぶことが日本の文化やコミュニケーションについての理解を深めることにつながり、授業のなかでは留学生同士でディスカッションをする時間やブレイクアウト時に出た意見を全体に発表する時間などが多く取り入れられていて、活発に意見交換を行うことができました。さらに、授業時間とは別にconversation partnerと会話をする時間が設けられていたため、現地の学生と交流する機会がありました。現在でも、そこで知り合った学生とお互いの都合を考慮しながら連絡を取り合っています。



新型コロナウイルスの影響により従来の留学とは異なる形での参加となりましたが、私は自分の考えを英語で伝えるということの難しさを実感し、課題を見付けることができました。さらに、2020年度から小学校5・6年生においても英語が教科化されたということから今後も英語という教科の重要性は高まっていくと考えられます。私は小学校教師を目指す1人として、これからも英語を学び続けていきたいです。

＊アメリカの協定校UNCW（University of North Carolina Wilmington）が協定校を対象に提供した約1カ月間のオンライン留学プログラム。本学からは10名が参加。

グローバルセンターシンポジウム
多文化社会における教育の在り方を考えるシンポジウムを開催

第12回グローバルセンターシンポジウム「多文化社会における教育の可能性―ヨーロッパと韓国、日本の取り組みから―」を、2021年6月23日（水）にZoomによるオンラインで開催しました。

ゲストとして、本学の協定校であるスイスのジュネーブ大学心理学・教育学部アブデルジャリル・アッカリ教授、本学に留学経験のある関西学院大学の李順蓮講師、兵庫県加古川市立若宮小学校主幹教諭、滿石大輔氏を招き、講演を行いました。また、本学からはグローバル教育部門の中山あおい教授が発表しました。

シンポジウムでは、ジュネーブ、ドイツ、韓国、日本における移民の子どもの受け入れ状況や支援プログラム、教育現場における実践活動等について講演が行われました。

グローバル化に伴い、日本においても言語的・文化的に多様な子どもが増加している今日、多文化社会における教育についての関心は高く、本学教職員や学生110名が参加しました。参加者からは、「スイスやドイツなどを参考に（中略）、日本もより柔軟に教育プログラムを考えていくべきだと感じました」等、多くの意見が寄せられました。

留学生支援のお願い

留学生後援会では修学支援奨学金の給付による留学生支援を行っております。ご賛同くださる皆さまは、下記によりご支援下さい。
留学生支援のためのご寄附についても、税法上の優遇措置の適用を受けることができることとなりましたので、この機会にぜひご検討下さい。

寄附・納入方法

学内教職員
●一口500円/月、給与から天引き

学外支援者
●振込…任意の金額を下記宛てにお振込下さい
三菱UFJ銀行　藤井寺支店
普通預金　口座番号：5210211
名義：大阪教育大学留学生後援会（オオサカキョウイクダイガクリュウガクセイコウエンカイ）
●現金納入

連絡先／大阪教育大学留学生後援会　TEL：072-978-3300　E-mail：ryugaku@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

OVER the RAINBOW vol.29・30
年2回発行　第29・30合併号　令和4年3月31日（木）発行
編集・発行／大阪教育大学グローバルセンター
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1　https://ger.osaka-kyoiku.ac.jp/
連絡先／TEL：072-978-3299/3300　FAX：072-978-3554
E-mail：isc@cc.osaka-kyoiku.ac.jp